

研修会のお知らせ
35ページ参照

平成12年6月8日 第三種郵便物認可（毎月1日発行） 平成27年12月1日発行

2015.12

(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみやく 富薬

12号

第37巻

No.317



フウ *Liquidambar formosana* Hance (マンサク科 *Hammelidaaceae*)

生薬 ロロツウ(路路通) 冬に採取し、夾雑物を取り除き、水洗後陽乾する。

成分 未詳。樹脂(楓香脂)には cinnamic alcohol, borneol, cinnamic acid, cinnamylester 等を含む。

効能 鎮痛、通経、利尿薬として胃痛、腹痛、関節痛、月経不順、浮腫に应用する。また、アレルギー疾患や打撲捻挫に用いる。



生薬 フウ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



フウ属は北アメリカとアジアに4種が分布する落葉高木で、葉は互生します。*L. orientalis*は小アジア南西部原産で、樹脂は蘇合香と言ひ、『名医別録』(502-536)の上品に収載されています。モミジバフウは北アメリカに分布し、葉は掌状に5~7裂し、紅葉するところからカエデと間違えられることがあります。

「フウ」を漢字で書くと「楓」と書きます。日本では何時の頃からか「カエデ」と読み、取り違えるようになりました。中国ではイロハカエデ(*Acer palmatum*)が自生しているにもかかわらず詩を読んだり、絵画にしたりすることはありません。日本におけるカエデは平安時代から歌や絵巻に取り上げられ、多くの絵画も残されています。そこへ中国の漢詩や本草書などから葉身が3裂し、秋に見事に紅葉する大木「フウ(楓)」が伝えられたことから間違いが起こったのではと推測されます。実際、中国原産のトウカエデ(*A. buergerianum*)は葉が3浅裂し、秋に紅葉するところがフウに良く似ています。しかし、カエデ科植物の葉は対生するのに対し、フウ属植物は互生します。果実もカエデ科植物では翼のある翅果がプロペラ状に付くのに対し、フウの蒴果は2~3cmの球形の集合果で、両種には植物上の大きな違いがあります。

『大和本草』(1709)には「和名に楓をオガツラと訓す。その葉まことに白楊(ハコヤナギ)に似て兩兩相對す。加茂の祭に用るカツラ是なり。筑紫にてもカツラギと云。葉、カヘデより大きなり。花はササケの花のこつく三四月開く。形状は似たれどもカラの書にいへるやうにオガツラは紅葉せず。香なし。是真に楓なりや。未詳」と記され、オガツラが楓であるようだが、唐書とは違ってよく分らないと記してあります。フウが日本に伝わったのは1727年に中国商船によると言われ、『物類品鑑』(1763)に「漢産享保(1716-1735)中是を伝ふ。然ども御園及日光、両三株に過ず。其餘絶てなし」と伝来した時期が記され、「葉圓にして、枝をなす。三角ありて大き二三寸。形草綿葉のごとし。其实毬をなす。柔刺あり。其形圖中に詳なり。樹脂を楓香脂と云、功用多し」と本物のフウを表現しています。

中国においては、『爾雅』(紀元前2世紀頃の辞典)に「楓を攝(しゅう)といつてある。攝とは風が来ると攝攝として鳴るといふ意味だ」と風に揺れて音を出す様子が名前の由来であることが記され、葉として現れるのは『新修本草』(659)で、楓香脂の名で収載されていますが、楓果つまり路路通には一切触れていません。

果実を薬用として用いたのは清代(1636-1912)に入ってからで、『本草綱目拾遺』(1765)に「即ち楓実、一名攝子といふもので、これは楓樹に結ばれる子である。外部には栗殻のやうな刺毬があり、内に核があつて孔穴が多い。俗に路路通と名ける」、更に「楓果は外刺、皮、肉を去れば圓くして蜂窠のやうになる。即ち路路通である。その性は大いに能く十二經穴を通ずる。故に救生苦海に、水腫鐵脹を治するにこれを用いてあるは、その能く伏水を搜逐するからである」と用い方を追記しています。

(村上守一 記)